

研究分野のキーワード：日本近現代文学・文化，戦後文学・文化，表現文化

#### 研究紹介

私の専門分野は、日本近現代文学・文化です。ここでは、私が学び、思考してきたこと、その根本的な態度について、本学の受験生のみなさんの身近な事柄を手がかりにして紹介しようと思います。

高校までで学ぶ現代文、あるいは、大学入試対策として学ぶ現代文。これから本学を受験しようと考えているみなさんにとって、これらは文学について「学ぶ」主要な機会だと思います。これらの場面の中で、少なからず作家（作者・書き手）という存在が意識されます。特に評論など文章が入試問題として受験勉強の現場で扱われる際、その文章を書いた本人（作家や作者）のことが強く意識される場合があります。しかし、時に受験問題の設問／解答と作家が考えたことが食い違う場合も出てきます。

その時、みなさんは、入試問題を作成した人たちと、作家のどちらが正しいと判断するのでしょうか。おそらくは作家に軍配を上げるのではないのでしょうか。しかし、それは安直すぎます。私が学んできた日本近現代文学研究という専門分野からすれば、単純に「作家が勝ち」という答えを出すことはしません（正確には、出さない立場の人が少なからずいると言うべきでしょう）。このような考え方は、一般的な読書をめぐる経験からは非常識と思われるかもしれませんが。一般的な読書の中で、理解できない部分に出くわした際、多くの読者は「作家に聞くのが一番」と考えるでしょう。しかし、私が学んできた分野では、「作家が作品の意味を決定する権威だ」とは考えません。私たちが接する表現文化は、作家の意図によってその意味が決定されるほど単純なものではありません。表現文化は時に作者の作意をこえて、まったく異なる意味の作品として読み解くことができます。我々が鏡やカメラなどの道具を使わなければ、自分の後頭部や背中を見ることが出来ないのに似て、作家も自らの創作行為の全てを把握しきっている訳ではないのです。更にいえば、読者や鑑賞者が作品に向き合う中で、意味は様々な生まれます。読者と作品の相互作用によって、作家が思いもよらなかった別の意味が浮上するのです。

ここで述べた考え方は、文学理論や批評理論と呼ばれる分野の議論の成果によって獲得されたもので、更に複雑に深化しています。詳しいことは、大学に入学してから学んでいただくとして、私はこのような立場に依拠しながら、日本語によって表現された作品や映像作品、文化的事象（文学をめぐる裁判、アニメ、映画、小説、ファッション雑誌、ミュージックビデオ等々）がどのような仕掛けによって成立しているのか、あるいは、どのような意義を持っているのかを議論してきました。これからも引き続き、日本近現代文学研究で培われた問題意識を基点にして、様々な表現文化に取り組んでいきたいと考えています。